読む・書く・話す・見る・調べる

特集

# 長崎大学で学ぶ 知の対話

大学生になって経験する「知の対話」。
それはまさに未知の領域であり、胸が高まる、新たな学びとの出会いでもあります。
今回の特集では、高校と大学での学びの違いをテーマに語る巻頭インタビュー、
そして知の対話の実践例として科目をピックアップし
先生と学生に学びの内容、方法、醍醐味について話を聞きました。
知の拠点ともいえる図書館と知の対話を支えるさまざまな仕組みもお伝えします。

※取材時期は、オンラインでの講義を行っていました。

インタビュー

# 主体的な学びの先にある新しい知の発見と創造

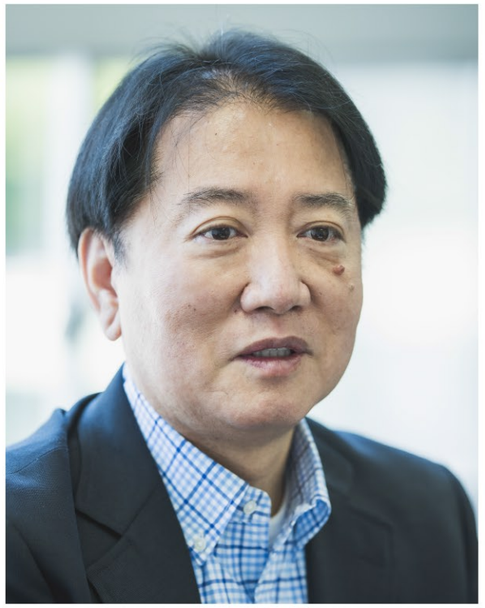
## 塚元和弘

理事（教学担当）　副学長

### 正解がない学問を深めるための三つの力

高校と大学の学びには大きな違いがあるといいますが、高校生の皆さんにはぴんとこないかもしれません。具体的に、学びはどのように変化するのでしょうか。塚元和弘理事（教学担当）に伺いました。

「そもそも大学は、知を創造する場所です。この点を踏まえて高校までの学問と対比した場合、大学の学問の領域は非常に深く、広い。そして自由とも言えるでしょう。強調したいのは、必ずしも正解があるとは限らないということです。私自身、高校までは数学が好きでテストでも良い点数を取っていましたが、大学ではそうはいきませんでした。例えば、ある数学の試験問題が出された時、作った先生でさえ、解けるか解けないか分からないとおっしゃったことが印象に残っています。この時は結局、答えまでたどり着けず、正解があるのかないのか検証までに至りませんでした。このように未知の問題に挑戦し、検証しながら考える。それが大学の教育であると初めて実感したことを覚えています。具体的には、先人たちが蓄積してきた資料の中から必要な知識を蓄えつつ思考を深め、新しいアイデアの発見につなげます。さらにそのアイデアは、周りの人たちに認めてもらわなければ意味がありません。このように、新しい知を創造する上では、思考する力、証明する力、表現する力という三つの力を身に付ける必要があります」。



TSUKAMOTO Kazuhiro

つかもと かずひろ
1987年長崎大学医学部医学科卒業。1993年同大学院医学研究科博士課程修了。博士（医学）。同大学病院研修医、米国ボストン大学先端バイオテクノロジーセンター研究員等を経て、再び長崎大学医学部職員として着任。2004年より同大学医歯薬学総合研究科・薬物治療学（薬学系）教授。2016年10月より入試担当副学長。2017年10月より教学担当理事・副学長。専門分野はゲノム医科学、腫瘍学等。

大学ではどのようなカリキュラムが用意されているのでしょうか。

「長崎大学の教育プログラムは教養教育と専門教育で構成され、一年次の初めに学部単位で初年次セミナーを実施します。内容は学部ごとに異なりますが、学生数人に対して一人の先生が付き、グループワークなどのアクティブラーニングを十五回にわたって行います。この時点で考え方を大きく切り替え、深めるための準備をします。他にも教養教育には、モジュール科目などが含まれます。一方、専門教育には基礎と応用があり、その先に卒業研究があります」。

### 知的好奇心に基づいて探究する醍醐味

正解のある問題に慣れている学生たちにとって、大学で初めて出会う学びはとてもわくわくするものになりそうです。

「確かにそうですね。大学では、座学をはじめとして、実験や実習、あるいはフィールドワークでの調査や観察もしなければいけません。最終的には、レポートや卒業論文に成果をまとめて発表もします。単位を取得しているだけでなく、大学が定める能力や態度も身に付いていると認められたときに学位が与えられます。高校とは違い、大学では主体的かつ能動的に学ぶ姿勢が重要なのです。もちろん、初めからすんなり良いアイデアが出せるわけではなく、先生や同級生と議論を交わしながら試行錯誤を繰り返していきます。その過程では、挫折しそうになることもあるでしょう。だからこそ、一年次から多様な問題や課題を前にした時には少し立ち止まり、自分自身の内面とじっくり対話し、やりたいことや夢をしっかりと認識してもらいたい。国内外のさまざまな人と出会ったり、議論したり、読書をしたりして、興味を持ったものには積極的に取り組んでみるのもいいですね。興味が赴くものを見つけ出す努力をしてほしいと思います。知的好奇心に基づいて探究してみたいと思うものを見つけておけば、苦しい時も乗り越えて最後までやり遂げる原動力になるからです」。

長崎大学では、初年次セミナーのほか、主体的な学びのコツを伝授する「長大生のためのラーニングティップス」の発行など、一年次から新しい知を創造する力を鍛えるためのさまざまな仕組みが用意されています。

次のページから、大学の知を深めるための各学部の特徴的なプログラムを「読む・書く、見る・調べる、話す」といったキーワードを切り口に紹介します。

知の対話

### 長大生のためのラーニングティップス

長崎大学に入学した1年生の皆さんが、大学での学びを順調にスタートできるように作成されたオリジナル解説冊子です。初年次セミナー用の副読本として、2016年3月に初めて作成され、その後改訂が重ねられています。前半では、文章を読むこと、他者とディスカッションをすること、プレゼンテーションをすること、文章を書くこと、大学とのつながり方という5つの項目を取り上げて、コツを分かりやすく紹介しています。後半には、学生の皆さんが自立して学びを深めていけるように、長崎大学が用意している仕組みについて説明した資料が掲載されています。

ラーニングティップス表紙

### モジュール科目

現代的な課題となっているテーマを基に集められた授業科目群を「モジュール」と呼びます。長崎大学では、さまざまなテーマのモジュールが用意されており、全学モジュールと学部モジュールの2種類で構成されています。全学モジュールでは、各学部の学生がそれぞれの興味・関心に基づいてモジュールを選ぶことができます（現在、教養教育の充実のために、モジュール科目の一部見直しを検討しています）。

# 読む・書く

文献やデータを読み解く、
調査した内容を分かりやすく書き記して伝えるなど、
あらゆる専門分野で生かされるのがこの二つの力。
単純なようで奥が深いスキルであり、
さまざまなプログラムの中にその要素が盛り込まれています。

〈知の対話〉

## さまざまな意見や情報を集めた上で自らの主張を定める

### 水産学部　初年次セミナー（一年次）

山田明徳 准教授

水産学部の一年次前期の「初年次セミナー」。教員ごとに学生が十人程度のグループに分けられ、大学での学びの基礎能力を身に付けます。山田明徳准教授の初年次セミナーでは、高校までの学習との違いに学生自らが気付くことを大切にしています。

「最初に『鯨食について』といった大まかなテーマで自由にレポートを書いてもらいます。そして、その内容を学生同士で共有して読む中で、どういう書き方やまとめ方が良いのか、どんなレポートが人に読ませる内容なのかを考えてもらいます。この時、こちらから明確な見本を見せることはしません。大学での学びの目標は、試験に受かることではなく、自分の能力を高めることです。答えのある与えられた課題に受け身で取り組むのではなく、主体的に考えるための意識改革が必要なのです」。

レポート作成後は、テーマに対して賛成・反対のグループに分かれ、それぞれ相手を説得するためのプレゼンテーションを実施するそうですね。

「説得力のある主張には裏付けとなる情報が必要ですし、相手の主張も知らなければ説得することはできません。事前にさまざまな情報を調べて、グループ内でも意見を交わしていくことで、初めて自分のスタンスが明確になっていくのです」。

実際に山田先生の講義を受講した竹尾百音さん（三年）は、「情報の確実性を高めるために学術論文や公共団体の発表内容を参考にしましたが、最初は自分の意見を組み立てるのに苦戦しました。年次が上がるとレポートや研究で考えをまとめる機会も増えるので、初年次セミナーで学んだ情報の読み取り方が役立っています」とのこと。自ら考えて疑問を持つことが、大学ならではの学びの本質につながっていきます。

データや情報を事実として捉えるだけではなく、そこに疑問を持って主体的に調べ、知識を深めていきたいです。

竹尾百音さん

時間がかかっても学生同士の気付きを重視。今年度はオンラインでの学修となりましたが、一方的に教えるのではなく、お互いに意見を交わします。

## 社会人としても問われる読む・書く・伝える能力

### 経済学部　基礎ゼミ（二年次）

テーマについてのレポートをまとめるだけでなく、ゼミの学生同士で意見を交わしていく中でも、自分の考えがまとまっていきます。

一年次と三年次の学修をつなぐ内容の「基礎ゼミ」は、経済学部二年次前期の講義。深浦厚之教授のゼミでは、レポート作成を通じて、自分の考えをまとめる基本的な能力を養います。

「レポートのテーマはさまざまで、例えば、経済学部のキャッチコピーを考えたり、有名なお菓子の製造工程やプロモーションを分析したり、私の専門分野に絡めてEUの金融政策に関する文献を扱うこともあります。共通して学生に求めるのは、自分なりの問題点を含んだレポートにまとめることです。ネットで調べたことをそのまま書くだけのレポートではなく、そこから一歩踏み込んで考えることが必要です」。

レポートをまとめる際に、心掛けておくべきことはありますか。

「問いは主観的に、答えは客観的にということです。高校までの授業では、先生から与えられた共通の課題で自分なりの考えを述べる機会が多いと思います。しかし大学ではその逆で、自分の感性や経験が反映された問いと、データや史実に沿った説得力のある答えが求められます。これは社会に出てからも同じで、仕事相手や同僚、上司を説得する際にも重要な考え方です。最終的に問われるのは、いわゆる『読み書きそろばん』の能力。きちんと文字を理解できて、論理的に考えたことを文章にまとめられる、そんな学生を企業も求めています」。

深浦厚之 教授

最初は自分の考えをうまく文章にまとめられず苦労しましたが、ゼミのメンバーと切磋琢磨していきました。

石場絢さん

基礎ゼミを受講した石場絢さん（三年）は、「自分が何を伝えたいのか、伝えるためにどのように考えて話を展開すればいいのか、大学に入ってから初めてちゃんと学べたという実感があります。一見地味なことのようですが、今後の研究活動や論文作成にも役立っていくと思います」と話しており、学修の土台につながったそうです。

## 問題を解くだけではない仕組みを読み解く面白さ

### 教育学部　解析学Ⅲ（三年次）

教育学部の「解析学Ⅲ」は、中学校教育コース数学専攻の学生が三年次で受ける講義です。微分方程式を用いて関数の動きを計算する発展的な内容ですが、担当する熊崎耕太准教授は、数学ならではの面白さと奥深さを伝えようとしています。

「微分方程式の特徴は、答えが値ではなく関数であり、さらにその関数をグラフとして視覚化できることです。方程式とグラフの動きを比較することで、さまざまな手掛かりを読み解くことができます。しかし計算の複雑さから苦戦する学生も多くて……なるべく面白い講義を心掛けています」。

熊崎耕太 准教授

講義を受講した数学専攻の高坂響さん（四年）は「抽象的な論理を展開するのは難しかったですが、新しい概念で定義に立ち返りながら問題を解くのは楽しかったです」とのこと。難しそうな講義ですが、先生はどのようなところに面白さを感じますか。

「微分方程式は身近な現象の予測に使われています。例えば、新型コロナウイルスの感染の広がりを予測したグラフもその一つで、何気なくニュースで見ている情報の裏にも数学が深く関わっています。また、微分方程式では、時間や数、位置など、ものの動きを表現できるので、自由にテーマを設定できます。身近な日常とつながることが面白さの一つですね。そして、高校までに習う運動方程式や等速直線運動も、実は微分方程式で解説できるんです。これまで当たり前に勉強してきたルールの『なぜ』を学び理解することで、問題を素早く解くだけではない、少し違う角度での数学の奥深い魅力が感じられるのではないでしょうか。学生たちには将来、教科書をなぞるだけではなく、いろいろな方向から数学の魅力を伝えてほしいと思います」。

数学の背景を知る面白さを講義で伝える熊崎先生。「ここが面白いというポイントを、自分自身が楽しみながら学生に伝えています」。

これからも『なぜそうなるのか』という根本的な部分を自分自身で考える能力を伸ばしていきたいと思います。

高坂響さん

# 見る・調べる・知の対話

## 文化財を支える仕組みからまちづくりを探る

### 工学部　エンジニアリングデザイン（三年次）

構造工学とは、さまざまな構造物を造るために必要な考え方や技術などを形成する学問体系の一つ。構造工学コースではその観点から、教会や原爆遺跡など、長崎にある文化財を観光資源として保存および活用する上での課題や対策の検討を通じてデザイン能力を身に付ける「エンジニアリングデザイン」を、三年次に履修します。佐々木謙二准教授のお話です。「対象となる構造物は学生がグループ単位で考え、県や市といった行政の皆さんに成果を提案できるような内容に取りまとめることを大きな目標としています。学生の自主性や興味に任せる部分が大きく、実社会の課題解決に向けてプロジェクトとして携わる面白さや難しさを経験します。面白さとしては、提案が受け入れられ、実現に向けて動き出していくことがその一つとして挙げられます。城山小学校被爆校舎を対象に取り組んだグループの例では、提案が長崎原爆遺跡の保存活用計画や整備活用計画に反映されました。難しさとしては、解決すべき課題そのものを見いださなければならないことなどがあります」。本多南菜さん（四年）が取り組んだテーマは、「グラバー園周辺の活性化に向けた都市計画」です。「グラバー園近くにある斜行エレベーターの利用者数を増やすためには、観光客に分かりやすい周辺整備が大切だと考え、都市計画と模型製作を実施しました。現場調査を行い、最寄りの駅から斜行エレベーターが見えないこと、乗り場周辺に大規模な駐車場がないことなどの問題点を見つけました。長崎市が抱える課題をまちづくりや建築の知識から考える中で、町の魅力にも気付くことができました」。

2016年度に城山小学校被爆校舎の保存について取り組んだグループ。学内での高評価を受けて、原爆資料館の館長およびスタッフの皆さんにも案を発表する機会を得ることができました。

現実の課題解決に向けて実務に近い視点で取り組んだことは、将来に役立つ有意義な経験になると感じています。

本多南菜さん

現地調査を踏まえ課題解決策を検討。さまざまな制約条件がある中で、実現可能な内容に落とし込んでいく難しさも実感します。

佐々木謙二 准教授

## 現地に足を運び全身でその人と向き合う

### 多文化社会学部　リサーチ入門（一年次）・リサーチ基礎（二年次）

一年次から、知識やスキルを少しずつ積み上げていくためのフィールドワーク関連科目が充実している多文化社会学部。フィールドワークは単なる見学ではなく、その前に訓練が必要だからです。二〇一八年の「リサーチ入門」および二〇一九年の「リサーチ基礎（インタビュー、参与観察）」の科目責任者を務めた増田研准教授のお話です。「明らかにすべき課題は現場にあり、人の話を聞いたり、文献を調べたり、積み重ねの中から得られる発見も少なくありません。そのために必要な手法として、まずはさまざまな調査方法について理解を深め、インタビュー、映像、サーベイなど、スキル別に設定された実習科目を履修します。それらの集大成が、三年次の国内・海外フィールドワーク。そして最終的には、卒業論文の出来栄えにもつながるのです」。

一昨年よりリサーチ基礎（インタビュー、参与観察）では、長崎市の外海地区から西海市にエリアを絞り、学生自ら課題を見つけて調査。杉岡恭介さん（三年）は、昨年の調査に参加しました。「西海市雪浦地区に雪浦くんちという祭りがあります。全国で少子化や人口流出によって祭礼の維持が困難になる中、形を変えながらも継承されており、継承と変容、地域における役割をテーマに調査しました。先行研究などの文献調査だけでなく、五人の方へのインタビューも行いました。インタビューが進むにつれ、消滅の危機と新たな継承者の登場というドラマのような展開を経て現在の姿へとつながる物語が語られる様子は、奇跡を目の当たりにしているようでした。自分たちで問いを立て、その答えを探るためには何をすればいいのか、インタビューの際にどのような質問をすればいいのか、事前準備が重要であることも学びました」。

2016年と2017年にはアフリカのザンジバルで海外フィールドワーク実習を実施。帰国後は報告書を刊行したほか、写真展なども行いました。

増田研 准教授

昨年の雪浦くんちの様子。

訪れた土地に住む人々の話を聞き、感動をレポートに記述できることがフィールドワークの魅力だと思います。

杉岡恭介さん

## 自ら動くことを通して野外調査の手法を身に付ける

### 環境科学部　環境フィールド演習Ⅰ（一年次）・Ⅱ（二年次）

環境科学部では、入学直後から環境問題の現場を体験できる場が準備されています。その一環が「環境フィールドⅠ・Ⅱ」。まず演習Ⅰでは、ごみ処理場・最終処分場、浄水場、下水処理場を見学します。担当の朝倉宏准教授におお話を伺いました。「例えば、ごみの焼却は、明治時代にごみの排出量が増大し、コレラがまん延したために始まった処理方法です。つまり、命を守る施設だということです。このような各施設の社会的意義や原理を理解するための講義を、見学前に三回行います。講義では、座学ですべて伝授するのではなく、個人にテーマを割り当てて学習を進めた後、同じテーマの学生と互いに確認し合うなどのアクティブラーニングを実施します。他者への伝達や足りない部分の聴取といった能動的な作業を経験し、個人個人が何らかのテーマについてエキスパートになった上で見学に臨みます」。

演習Ⅱには、動植物から地域社会における文化まで多彩な調査テーマが六つあります。担当の山口典之准教授は、長崎バイオパークで動物園実習を実施しています。「環境科学部は二年次から文系と理系にコースが分かれますが、学際的な研究が求められる場面も少なくありません。そのため、この科目では六人の教員がそれぞれ得意とするテーマを提供し、文理問わず調査してみたいものを選択できます。具体的現実の中で、調査計画、観察やデータの取り方、成果のとりまとめと発表の仕方など、野外調査における手法の基礎を実践的に学べます」。

高山大輝さん（水産・環境科学総合研究科二年）は、演習Ⅰ・Ⅱについて次のように振り返ります。「廃棄物焼却施設や浄水場などを実際に見学することで、座学で学んだ知識を定着させることができました。私たちの生活が、見学した施設や職員の方々によって支えられていることを改めて実感する機会にもなりました。演習Ⅱでは長崎市西山周辺のさるくマップを作製しました。役割分担を行い、限られた時間の中で効率的に作業を進める大切さを学びました」。

1年次に履修する演習Ⅰは全員必修で、廃棄物焼却施設・最終処分場、浄水場、下水処理場を見学します。事前学習をしっかりした上で現場に臨みます。

プラスチックごみに混ざっている不燃物は、人の手で仕分けられていることを知りショックでした。出す側でしっかり分別する必要性を痛感しました。

高山大輝さん

朝倉宏 准教授

研究テーマに基づいてレポートや論文をまとめるまでの過程には、フィールドワークという手法があります。課題を見つける力、調査する力、解決する力。有意義な研究成果を得るために必要なさまざまな力を実社会という現場で養うプログラムに注目します。

# 話す

大学では、自身の専門を深めていくのと同時に、それを人に伝える難しさを痛感する場面が多々あることでしょう。「伝える」と「伝わる」は違います。各学部には、「話す」技術の磨き方を身に付けられるプログラムもあります。

〈知の対話〉

## 医学は人と人との学問 敬意をもち患者に寄り添うことを学ぶ

### 医学部　臨床実習（保健学科三年次～四年次・医学科四年次～六年次）

江口晋 教授

医学部では必ず大学病院で「臨床実習」があります。医学科では四年次から六年次、保健学科では三年次から四年次。消化器外科の臨床実習を担当する江口晋教授にお話を伺いました。「医学とは、究極は人と人との学問だと私は考えます。理系の場合、宇宙やロボットなどと対峙してわくわくしますが、医学は人相手。ところが時折、コミュニケーションは苦手という学生もいます。そんな時私は、ここまで勉強してきたのだから腹をくくってコミュニケーション力を磨くしかないよ、と指導します」。臨床実習は、担当医が患者を診察する様子を見学することから始まります。「初診の十五分間で患者さんの信頼を得て、『この人に手術してもらおう』と決断していただく、真剣勝負です。そのためにはまず情報収集から。今朝は何を食べたか？家族構成は？など、はい・いいえで答えられない質問を目を見て投げ掛け、必ず患者さんの身体を診察します」。目配りや言葉遣いなど、患者への敬意を忘れないことも大切といいます。「特に大学病院の場合、重篤な疾患を抱えて最後の望みを託す患者さんも多く、それだけ責任が重いことを覚悟しなければいけません」。実習を体験した中友レナさん（六年）にもお聞きしました。「外来で印象的だったのは、先生が患者さんに分かりやすい言葉で、時には絵を描きながら説明されていたこと。触診でも、『○○に触れますが、少しひやっとします』と声掛けをするなど、患者さん目線の対話や気遣いが勉強になりました。実際に自分が問診してみると、必要な情報を聞き出すのはとても難しかったですね。自分が今学んでいることが将来の患者さんを救うことにつながるよう頑張ります」。

糸結びの講義中。「外科の場合、自分の手を使って切ったり縫ったりといった仕事をしますから、責任が重い分、達成感もありますよ」と語る江口先生（左）。

必要な情報を聞き出す問診の難しさを実習で学びました。内視鏡手術、ロボット手術のシミュレーターの操作も体験でき、印象深かったです。

中友レナさん

診察を終えて患者が退出した後に、見学していた学生と診察のポイントや観察結果を話し合うのだそうです。

## 動物実験も準備や考察からプレゼンテーションまでひとくくり

### 歯学部　薬理学及び同実習（三年次）

筑波隆幸 教授

薬がなぜ効くかを探求する薬理学では、多くの動物実験も行われます。筑波隆幸教授にお話を伺いました。「実験は五人ずつの班ごとにテーマを決めて実施しますが、実習だけでなく、目的や方法、結果、考察などをプレゼンテーションで発表することまでがひとくくり。最近はパワーポイントも作りやすくなり、昔の学生と比べて発表が格段に上手になりました」。

実験の中には、医歯薬学共通の基礎的なもの、歯学部特有のものもあります。

「例えば、マウスに麻酔薬を投与する実験では、注射する人、呼吸数を測る人、時間を測る人、記録する人と手分けします。動物が嫌いな人は注射以外の仕事をします。カエルに興奮薬を投与する実験では初めてカエルに触る人が多いので、カエルだけでなく学生も興奮します（笑）。プレゼン能力や話す力も人によりますから、得意な人はそれを磨き、不得意な人は実験の準備や採録、動物の取り扱いなど、まずは得意な分野を伸ばして自信をつけてほしいですね」と筑波先生は語ります。

薬理学を学ぶ日浅匠さんと梅村凌介さん（共に五年）は、骨の破壊に作用する破骨細胞の研究に取り組んでいます。「培養した破骨細胞を特殊な顕微鏡と蛍光剤で撮影する実験では、初めて自分で蛍光写真を撮影でき、感動しました」と日浅さん。プレゼンテーションはあまり得意ではないので、上手な人を見ながら練習するそうです。一方、梅村さんは、「高校生の頃から人前での発表は得意でした。本当に伝えたいことをまず念頭に置いて、はっきりした声で話し、早口にならないよう心掛けています」とのこと。二人とも他学部とのグループワークなども経験しており、歯科医師としてのコミュニケーション力が鍛えられるといいます。

薬理学に限らず、歯学部では顕微鏡を使った地道な観察やさまざまな実験を重ねます。

正しい姿勢で聴衆に視線を向けて、早口になりすぎないように。実験のまとめや症例の治療方針などプレゼンの機会は多く、だんだん慣れていきます。

梅村凌介さん

まだまだ未熟ですが高校の時と比べると成長したと思います。先生方や先輩が親身になって手厚くサポートしてくれます。

日浅匠さん

## 自分のテーマを伝える力を鍛える場

### 薬学部　分野横断型 研究ポスター発表会（四年次）

田中正一 教授

薬学部には、四年制の薬科学科と六年制の薬学科があります。初年次からパワーポイントを使ったプレゼンテーションなどを段階的に学びますが、薬科学科四年次の卒業論文審査後に行われるのが、分野横断型の「研究ポスター発表会」。自分の研究テーマに関するA0サイズのポスターを掲示し、その横に立って説明もします。言ってみれば、四年間の学びの集大成。取りまとめている田中正一教授のお話です。「自由参加ですが、毎年二十人以上がチャレンジします。分野横断型ですから、自分の専門以外の先生や学生、先輩・後輩などに自分のテーマをいかに分かりやすく説明するか、同じデータでも話し方一つで聴衆の興味は変わります。話すトレーニングになりますよ」。学術研究という大きな世界で、自分の研究がどこに位置し、その内容や結果、データがどのような意味を持つのか。伝える力は、就職のための企業面接などでも求められます。三月の発表会で優秀ポスター賞を受賞した光成晃輝さん（医歯薬学総合研究科一年）にもお聞きしました。「私は運動障害の一種である発作性運動誘発性ジスキネジアという疾患の研究を行い、マウスを使った実験成果を発表しました。もともと自分の意見を人に伝えるのは苦手でしたが、発表内容には自信がありました。事前に先輩に相談したところ、文字よりも図を使って要点を簡潔に説明するといったアドバイスを受け、上手な人の話し方を真似るなどして練習を繰り返しました。本番では先生方からの予想外の視点の質問に苦戦し、後輩への説明には相手の知識量に合わせて言葉を選ぶことに頭を使いました。伝える力を鍛える大切さを実感できました」。

発表会の様子。多くの学生や先生がポスター前に集まります。最新の研究が多く、特許の関係で公表できない場合は教員限定で別室にて開催するそうです。

素晴らしい発表内容を持っていても、伝わらなければもったいないと思います。評価されれば研究に対するモチベーションも上がります。

光成晃輝さん

# 知の拠点 図書館

さまざまな情報が集まる図書館はまさに「知の拠点」。書籍の貸し出しだけではなく、オンラインでのサービスやラーニングコモンズなど、読むこと以外にも役立つ機能が充実しています。うまく活用すれば、自分の考えを深めることができます。

高校までとは異なる大学図書館ならではの特徴は、その膨大な情報量です。新聞や書籍、雑誌、データベースなど、さまざまな情報に包括的にアクセスすることができます。図書館の上手な活用術について、中央図書館（学術情報管理課）の浦さやかさんに伺いました。「とにかく情報量が多い図書館ですが、検索や資料の閲覧方法を把握することで、より効率よく利用できます。また、学外から図書館ホームページを通じてアクセスできる情報も充実しています」。図書館は学部ごとの専門性にも特化しています。坂本キャンパスにある医学分館は、医学・歯学・薬学・保健学などに関する書籍を中心に所蔵し、近代医学史料展示室には貴重な学術書などが収蔵されています。また、片淵キャンパスにある経済学部分館は、経済学関係の書籍や雑誌などを中心に所蔵。長崎大学経済学部の前身校で長年教授を務めた武藤長蔵博士が集めた貴重な資料や絵画が残された武藤文庫もあります。特色ある図書館の資料を、学生は興味のある分野に合わせて活用しています。

学びのヒントになる
新書や一般図書はもちろん
専門的な書籍や雑誌も保管

## 参考図書・書庫資料

図書館にはさまざまな書籍がそろっており、それらを活用してレポート作成や研究に役立てることができます。読みやすいサイズで特定分野のまとまった知見を得られる新書や、長崎での学修に深く関わる郷土資料、また新聞記事や雑誌、専門書も閲覧することで、より幅広い知識や情報を得られます。

郷土資料も充実

一部の専門書や雑誌が収められた書庫を利用するには入庫手続きが必要。国内外の雑誌が保管されているので、参考にしたい論文を探すのにも役立ちます。

図書館内で
自由に語り合いながら
アウトプットする共有空間

## ラーニングコモンズ

会話ができる、ゆったりとしたフロア。友人たちと勉強しながらその場で教え合えるので、ラーニングコモンズ目当てで図書館に来る学生もいます。

図書館に、学生同士が教え合い、学び合える空間を。そんな思いで設けられた中央図書館1階の大きなスペースが「ラーニングコモンズ」。予約なしで自由に使えるスペースで、他の階と異なり会話はOK。グループディスカッションやプレゼンテーションの練習にも利用でき、机や椅子も自由に動かせます。また、予約制のグループ学習室はホワイトボードや大型ディスプレイなどの設備も充実。こうした空間で学生同士が意見を交わすことで、多様な視点を取り入れて学修を深めることができます。

図書館は、書籍の貸し出しにとどまらない、総合的な機能を備えています。活用方法で分からないことがあれば、気軽に何でもご相談ください。

中央図書館（学術情報管理課）
浦さやかさん



資料の場所や
図書館の使い方など
何気ない疑問を相談できる窓口

## レファレンスサービス

図書館資料について何でも気軽に質問することができます。思いも寄らない資料が見つかるかもしれません。

目当ての書籍や資料が見つからない、関連する情報の調べ方が分からない。そんな時は、図書館職員のいるカウンターで相談しましょう。直接相談できるレファレンスサービスは図書館ならでは。研究や講義に関連する書籍や情報を入手する手伝いをしてくれます。検索システムや施設利用に関する情報は「図書館ガイダンス」を開催して解説。図書館ホームページにはガイダンスのテキストが公開されているので、特に入学したばかりの学生の役に立ちます。

貴重な古写真や
学生の制作物を展示した
新たな視点を得られる場所

## ギャラリースペース

中央図書館1階にあるギャラリースペースでは、所蔵している古写真などのパネルや、学生による展示物が公開されています。開館時間中はいつでも見学できるので、勉強の合間やちょっとした空き時間に立ち寄ると新しい発見があるかもしれません。過去には、書道部、華道部、写真部などが作品を展示。学部の講義による発表やギャラリートークも行われました。

企画展は不定期で開催されます。展示の予定はホームページで確認できます。

必要な情報を
スムーズに閲覧・入手できる
充実したオンライン検索システム

## 電子ブック・電子ジャーナル・データベース

レポートや論文作成においては多くの参考文献や論文が必要になります。電子化された情報の活用が求められます。

図書館では、紙の資料に触れられるほか、書籍や論文を電子化した膨大なデータにアクセスすることもできます。蔵書検索システム（OPAC）はもちろん、電子ブックや電子ジャーナル、さまざまな情報を蓄積したデータベースも利用可能。検索機能を活用することで必要な情報を素早く入手でき、大きな専門書の持ち運びにも困りません。図書館内の端末からだけでなく、自宅や大学構内からもパソコンやスマートフォンを使って情報を得られるサービスも充実しています。

まだまだある

# 知の対話を サポートする仕組み

その他、長崎大学には学生の学びやコミュニケーション力を
サポートするさまざまなシステムがあります。
上手に活用して世界を広げる学生も多いのです。

リニューアルしたキャリアセンターは、他の学生や一般の方々との交流スペースが一段と広くなりました。

## キャリアセンター

### 経験も交流も 本人のやる気次第

昨年十月に新設されたキャリアセンターは、「キャリア＝生き方」と定義し、学生と社会をつなぐプラットフォームの役割を果たしています。「キャリア＝就職活動」は、もう昔の話。一年次からさまざまな経験を積み、充実した学生生活を送ることで、就活だけではなく卒業後のキャリアの糧にできます。そのためには、勉学で身に付けた「読む、書く、話す」などの基本スキルを実践的に使う場が必要とされます。例えば、バスツアーで県内企業の職場を見学し社長さんや社員さんとお話をしてみる、あるいは社会人と一緒に地域交流イベントを企画・運営してみる、といった多彩な取り組みを積み重ねることが大切です。最終的には、「自分が何に向いているのか」、「どんな人生を送りたいのか」に気付き、将来の指針にできたら素晴らしいですね。「就活とは棚卸しのようなものです。三年生になって慌てて棚を見たら何も並んでいなかった、では困りますよね。四（六）年間の大学生活を無自覚に過ごすか、目標を持ってチャレンジするかで、自分の棚の品ぞろえ（経験や知見）は違ってきますよ」とは、キャリアアドバイザーの境宗徳さん。学部・年次を問わずすべての学生がキャリアセンターを利用でき、機会は広く平等に開かれています。

長崎県内外の企業や自治体との交流には、1年次から誰でも参加できます。企業側も学生と接点を持つことで気付きがあり、まさにウィンウィンですね。

地域の人たちと一緒に活動できる縁JOYプロジェクトの「満月BAR」は、ベイエリアなどで地域交流の場を創出するイベントで、評判も上々でした。

## ラーニング・サポーター

### 大学院生が図書館で 後輩の相談をサポート

附属図書館（中央図書館）のサービスの一つで、大学院生が図書館内の専門カウンターに待機し、学部学生の学びに関する相談に乗ってくれるのがラーニングサポーター制度。レポートの書き方や図書館の上手な利用方法といった基礎的な相談から進学や就活の悩みに至るまでを受け止めてくれます。現在、理系・文系の院生三人が登録しており、開催時には館内アナウンスで自らの得意分野の告知も行うとあって、ジャンルが合えばかなり突っ込んだ質問にも柔軟に対応してくれます。独学でつらくなったら頼りになる、駆け込み寺のような存在です。

外海地区の大中尾棚田の田植えも手伝いました。

## やってみゅーでスク

### ボランティアならではの とびきりの体験を!

ボランティアに特化している役割を担っているのが「やってみゅーでスク」。学生ボランティア活動の専門組織を運営している大学は全国でも珍しいそうです。二〇〇七年度に始まり十三年目を迎えます。マネージャーの湯川典子さんのお話です。「現在登録している学生は二八九八人（昨年度実績）で過去最高。一方、ボランティアを提供する地域の組織（「応援団」と呼んでいます）の数も二五五となりました。私どもの役割は、学生のボランティアを求める応援団からの情報を管理し、登録している学生に提供してマッチングを行うことです。近年は学生自主企画も活発になり、留学生の参加も増えています」。高齢者施設での餅つきをはじめとするイベントのお手伝いや、手のかかる棚田の田植えといった地域サポートの他に、キャンプと英会話を合体させた活動など、大学での学びが生きるものもあります。高校生の頃は消極的だったという山中大樹さん（水産学部三年）は次のように語っています。「小学生が数日かけて百キロの道のりを歩く『ながさき100km徒歩の旅』のサポートを二年連続で行いました。最初の年は子どもたちと一緒に歩いてゴールの感動を共有しましたが、二年目は子どもたちの様子を保護者に伝える広報班になり、全体を客観的に捉えるなど、役割が違えば視点も動きも違ってくることを体感しました。スタッフの方々の謙虚な姿勢にも学ばされ、大学ともバイトとも違うボランティアならではの経験が人生を豊かにしてくれました。勇気を出して一歩を踏み出してよかったです」。

「ながさき100km徒歩の旅」右から2人目が山中さん。

保育園の夏祭りのお手伝いの様子。

## ピア・サポート「ふらっぴあb」

### 大学生活の「困った」は 先輩にお尋ね

大学生活の疑問や悩みに応える窓口は長崎大学にいくつかありますが、先輩学生が親身に相談に乗ってくれるのが「ふらっぴあb」。「学生何でも相談室」の業務の一環として、現役長大生が運営するボランティア団体です。例えば、履修登録で何を選べばいいのか分からない人のための履修相談会や、オープンキャンパスでの案内などを毎年行っており、先輩ならではのスキルやノウハウを惜しげもなく伝授してくれます。サポーターは現在五十一人。後輩の悩みについて一緒に考えることで、共感力や客観的な視点を鍛えるトレーニングにもなるといいます。現在、ツイッターの「質問箱」で、高校生からの質問も受け付けているのだそうです。

スタッフの皆さんが持っているのが新入生歓迎冊子「長大の歩き方」。学部クォーター別時間割や持ち物、留学やアルバイト経験の本音、学生証でできることなど、ニーズに即したアドバイスが掲載されています。